

# 私の保育



川崎千東

## (一) 自讀

東京家政大学付属みどりヶ丘幼稚園という名の示すように、園は緑の木立に包まれたしあわせな環境に位置している。

創立以来、九十余年という学園史をひもとくと、校域の樹木数は、六五〇本を数え、樹種は、樫が大半で、樹齢百年を超えるものが多いと記されている。大学の正門を入るや、スタシイの大樹群が枝を張っている景観に、まず目をみはる。加賀前田藩下屋敷跡——旧陸軍第二兵器廠跡——東京家政大学という系譜からみても、校域がいかに広汎であるかが推測されよう。

冒頭に、園の環境を記したのは、この自然なくしては、私の保育を語ることができないからである。

美しき五月という佐藤春夫の詩を引用するまでもなく、学園の美しい五月は、椎や樫の新葉がほぐれる時の、あの精神的な強い香りの噴出から生まれる。五月の深い空の碧を吸いつくして屹立している樹下に立ち、この香に包まれると、心が萎えている時でも、神泉をふくんだかのように、生への活力が甦ってくるのを感じる。そして美しき五月は弾力となって、子どもたちと共に手足をはずませ、子どもたちと声をあわせて、うたいたいくなる。

保育の根源を、この自然との結びつきに求めよう。

幼いひとたちの心に大いなるものとの出会いの機を与えたい。

こう思い定めて二十年余、この間、幼稚園教育要領、教育要領改訂、中教審答申による先導的試行など、疾風のようによぎってゆくのを大樹の蔭によけて、今も、若い保育者と力を合わせて、初志に即した保育を続けている。

入園審査 募集人員が少ないので、応募者は四倍か四・五倍になる。身体検査・面接の方法をとってはいるが、結局は、抽せんだけで合格者を決定している。そのために、家庭も環境も子どもの質も種々雑多。自閉症に近いのも発達遅滞のように思われるのも入り交って入園し、園は現今社会の縮図のようで、それなりに意義ある良い社会構成を成している。

保育の実態 友だちと二人以上であれば保育者に声をかけるだけで、校域の何処へ行っても良いことにしている。女子大生の目が至る処で見守っていてくれるであろう安堵感と、かつて、カスリ傷程度の怪我しかないという実績とが、自信を確かなものにして、この大胆な許可となったのである。大学の授業の邪魔をした例は皆無である。戸外の自然界に子どもの心を魅するものが多

いからであろう。一度だけこんなことがあった。――戸外に向けてドアの開かれている教室を数名の男児が覗き見たのであるう、息はずませて保育室に戻ってきて、「先生々々、お姉さんたちは勉強していないのもあるよ。机に顔をつけて眠っているのだけだよ」と報告した。

中学、高校から抗議の電話がかかってくるのが、ままある。池の水をとりききてうるさい！（池が浅く十五センチメートル位なので、よく水がはりつめる）

桜の実を木登りして採っている。あぶない上に、木を傷めて困る。などの類なので、これらは季節的支障であるので、子どもたちのいたずらは不問にし、ここへは保育者が添付してゆくことにしている。

講堂の前の三番目の樅の木には、白い蟻がいっぱい集っていて、木がボロボロ粉をだしている。椎の木の下のおだまき草のかげに、かたつむりの赤ちゃんがたくさん生まれた。亀の餌なら、保健室の裏の石を持ち上げると、みみずがいつでもいるよ。小鳥の餌のはこべはここ、兎のための草はこちら。椎の実もスダシイとツブラシイの二種を弁別する能力もいつの間にか獲得している。子どもたちの発見の早さ、認識的確さにしばしば驚かされ

る。前述の白蟻の被害の対策を、施設課の方に注進する逆現象の有様になったりする。

年長組になると、広汎なキャンパスのどこかに秘密の場所と称する場所を持つようになる。まだ、私はその場所をつきとめられないでいる。グループにより季節によって、その秘密の箇所が移動してゆくりしいからである。とにかく保育者の知らない自分たちだけの共通のもののあることが、自由感の極致なのであろう。

## (二) 迷い

あそんではかりいては不可ない。それは放任である。巨大な機械化され組織化された現代に生きる子どもたちには、系統だった経験と知的な刺激が必要である。カリキュラムを綿密に立案し実践すべきである。

栗が落ちてている。発見し、拾い上げる喜びだけに止めることなく、まだ木に残っているイガのままの栗との相関関係を、子どもに理解できる程度に、認識させるべきである。

焚火は結構、しかし、ただ火にあたっていただけでなく、なぜ火は燃えるのか、どうしたらよく燃えるかなどを、実際の場で、教師は指導すべきである。

右のような理論を度々耳にするのであるが、理路も整い、科学

的でもあって、若い保育者はこの考え方に傾斜してしまう。でも……と私の疑問は頭を持ち上げる。

霜の朝、熊手で落葉や枯枝を掃き集めて、焚火をする。やっと燃えてきた、暖かいわねえ、小さい手をかざし、どの顔も充ち足りた表情になって、炉辺物語よろしく焚火はなしがはずむ。ああ煙い！ こっちへ来た方がいいよ、そっちに風が吹いているからさ。何だか、燃えなくなってしまったぞ。こうすりゃいいのさ。と、小枝でそっと落葉を持ち上げる。隙間に風が入って、再びパァッと燃えあがる。そうだそうすればいいのだから、と実行者が二、三人続いて、また火は燃えさがる。

やきいもをしようか。火の下にいもを埋めるより、火の上においた方がよく焼けるよねえ先生。このようにして陽が高くなる頃まで、焚火を囲んでの保育は、価値のないものだろうか。現代には歯車の噛み合わない経験主義保育にすぎないと評されるものなのか。

科学的とかいう発見も、焚火の燃える過程にあるように思うし、何よりも皆が楽しそうに火を囲んで、日頃は無口な子からも話が出るし、黙っている子がいても、からだが暖められ、芋の焼けるのを待っているうちに、心と心がつながってゆくのを感じる

——巨大な機械文明の中にいるからこそ、原始に近い素朴な姿に還らせたいと願うのは、時代に即さない保育なのであろうか。

### (三) 悩み

木登りと登攀棒の差異に就いて、いつも考えることであるが、二つとも攀じ登る目的は同じであっても、前者の感触は暖かく、後者は冷たい。目的に向つては登攀棒の方が合理的であるが、どうしても行動が直線的になる上に、登り降りの単純なものになり勝ちである。木登りは、攀じ登りかたも多様な上に、登つてゆく心に夢と期待がある。登りつめたところに安定した足がかりがあり、そこが想像と創造の行為が広がる起点になったりする。

マラソンをさせて、子どもの心とからだをきたえる——走るということを目的としたら、鬼ごっこことくらべてどうであらうか。

『走れ』は大人への従属の形となり、鬼ごっこの追いつ追われつは、興味を元とし、子ども同志の心のつながりによって展開してゆく。保育の中では、右に記したような問題にぶつかることが多いのであるが、一番大切なものを育てよう、大切なものとは何だらうと、迷い、手さぐりで行手の道の光りを求めている私の保育の現状である。

卒業生の男児が小学校二年生になって、心臓疾患で他界した。二年生になってからは、殆んど病院生活に明け暮れ、十日間ほどであったが、両親の切なる願いで、心臓外科で有名なS教授の病院でもお世話になっていたが手術はせずに帰宅し、別の病院で一か月ばかり治療中に不帰となったようである。

もともと未熟児として生まれ、虚弱のためにすべての発育が不十分で、必要以外の言葉を話さず、顔色は蒼白で、誘いかけなければじっと椅子にかけているといった日常の在園時の状態であった。性質が素直で柔和なので、クラスの子どもたちから疎外されることなく、年長組になった時から、クラスの子どもたちは、このM君の出来ることと出来ないことを理解するようになり、出来ないことについては暖かい配慮をするようになった。たとえば、昼食はどの席で食べてもよい習慣にしているが、席をとりっくらするのに、M君のためにはいつも席が確保されていた。しかも日当りのよいところとか、ストーブの傍の席とかを選んで。ままごとのお父さん役によくひっぱり出し、自分たちが動きの大きな遊びに移る時には、絵本などを持ってきて、陽溜りに椅子を運びすすめた。

私も、一緒に担任している若い保育者も、M君の弱さが表面に浮立って目立たないようにと、細かく配慮し、身のまわりのことはもちろん、絵を描いたり物をつくったりする時も、特別に手をかけた。月例で行う園外保育には、いつもしっかり手をつないで歩いた。意外と欠席も少く、食欲も普通にあり、「幼稚園へゆくのを楽しみにしています」と母親も喜んでいた。小学校への入学期が近づいた時「ぼく、〇〇校へ行くの」とうれしそうに皆の仲間入りをして語っていた。

〇〇小学校の校門をバックに写した、新しい服にランドセル姿のナップが送られてきた時、若い保育者と二人で、その無事な門出を祝福し合った。

初七日忌がすんで、母親が挨拶に来園した時、「小学校の先生が『こんな児を、幼稚園では気付かずにしたのか』と云われました。学校では、体操ができなくて、体操の時泣くので発見されたのです」

この小学校の先生の言葉に、母親も同感であることが言外に感じられた。心身の発達のおくれを気付いていたからこそ、心を砕き手をつくしたのであったものを。また、クラスの子どもたちのあの暖かい配慮は、死ということがかき消されてしまったのであ

るうか。私の胸にあふれる言葉はあっても、この涙に沈む母親に何がいえよう。黙して、ただうなだれるばかりである。

私は、ビニールハウスの役目をしたにすぎないのだろうか。母親には事実を告げ、M君にも、風雪の刺激を与えるべきであつたらうか。事実を告げることによって、母親が育児への期待を失い、M君を疎外視しはしなやかと怖れた。S教授が「生きても十六、七歳まで」と側近にもらされたという。M君の在園の二年間、友だちと溶け合って生活したこと、子どもたちもまた、M君の内側の世界まで理解したこと、これでよかったのではないかと、私は心のしこりのような残滓を噛みしめながら自らを慰めている。

(東京家政大学付属みどりヶ丘幼稚園)

